

KONAN UNIVERSITY

日本における韓国語教育の諸問題：初級韓国語テキストの文法用語・収録内容・語彙数、そして大学授業・検定試験との関連性を中心に

著者	金 泰虎
雑誌名	言語と文化
巻	9
ページ	217-235
発行年	2005-03-15
URL	http://doi.org/10.14990/00000420

日本における韓国語教育の諸問題

—— 初級韓国語テキストの文法用語・収録内容・語彙数、
そして大学授業・検定試験との関連性を中心に ——

金 泰 虎

はじめに

本稿は、日本における初級韓国語テキストの文法用語、収録内容及び語彙を調べて、それが大学の授業や検定試験といかなる相関性をもっているのか、またいかなる問題を抱えているのかを分析することを目的とする。

日韓国交正常化、韓国の経済成長やオリンピックの開催、さらには今世紀に入って、日韓ワールドカップサッカー共催をきっかけにして、日韓の交流ムードが一層の高まりを見せる中、日本では多くの大学が韓国語科目を開設し始めている。この緊密な交流や大学における韓国語科目増設と連動して、韓国語学習用テキストも数多く出版されている⁽¹⁾。

ところが、韓国語学習用テキストは著者によって、文法用語の名称、収録内容、語彙数にばらつきが目立つ。日本と韓国の密接な交流に伴って日本における韓国語学習用テキストの出版ラッシュは、このばらつきをさらに際立たせている。

すでに、菅野裕臣氏は初級韓国語で扱うべき内容について、独自の提案を行っている⁽²⁾。未だに日韓国交正常化にまでたどり着かず、日本の大学における韓国語科目の開設も少なかった時期のことだけに、日本における韓国語教育の将来を見据えた卓見であった。

しかし、菅野氏の提案は、その後出版されている多数の初級韓国語テキストには反映されておらず、文法用語の相違や語彙数のばらつきに対する努力もほとんど行われていない⁽³⁾。

このような文法用語の相違、収録内容や語彙数のばらつきは、大学教育水準の不均衡や格差をもたらす一つの原因になり、ひいては学習者を混乱させて学習を妨げかねない。

本稿では、こうした事情を踏まえて、1960年代から現在に至るまでの日本の大学における韓国語科目開設の推移や、大学向けの初級韓国語テキストを調べる。その上で、現在日本の大学で採択されている初級韓国語テキストを中心に、文法用語の相違、収録内容や語彙数のばらつき、そして大学授業や検定試験との関係について考察する。

第1章 韓国語科目開設の推移と初級韓国語テキストの出版

本章では、1960年代から現在に至るまで、必修か選択かを問わず、日本の大学における韓国語科目開設の推移と初級韓国語テキストを網羅的に分析する。

(1) 大学における韓国語科目の開設

以下の(表1)では、1961年から2001年に至るまで、韓国語が受講できる日本の大学の数を示している。

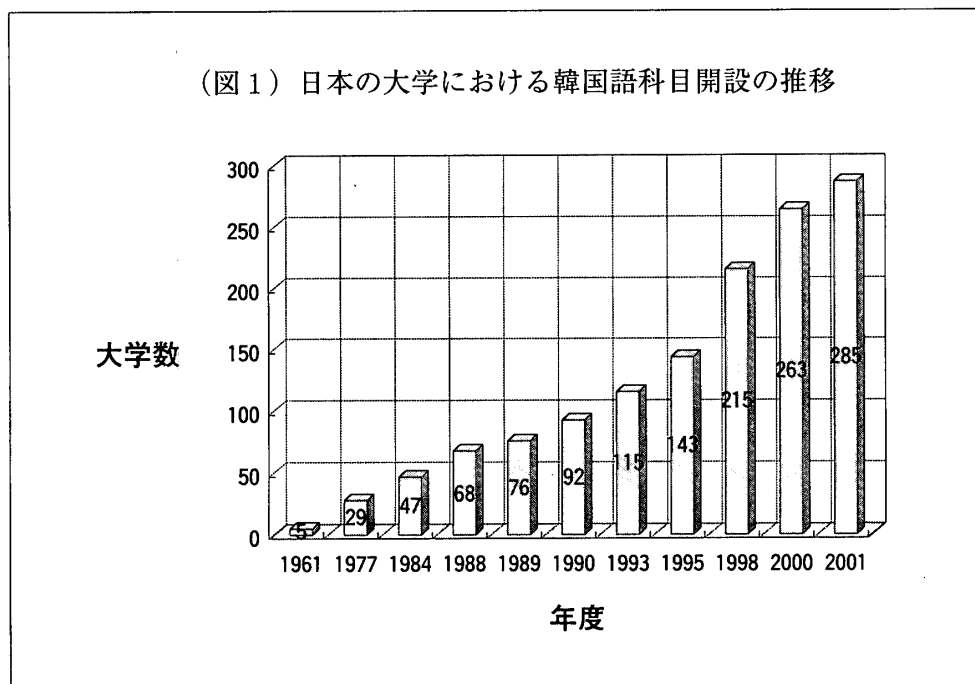
(表1) 日本の大学における韓国語科目開設の推移

時期	学校数	資料
1961年	5校	「日本の大学における朝鮮語教育とその展望」(『当面の朝鮮に関する資料』日本朝鮮研究所、1961年)
1977年	29校	「日本における朝鮮語教育」(『言語』9月号、大修館書店、1977年)
1984年	47校	「日本の大学における朝鮮語教育の現状」(『季刊三千里』38号、三千里社、1984年)
1988年	68校	『日本の大学等における韓国朝鮮語教育—2002年度調査の中間報告—』(財団法人国際文化フォーラム、2003年)
1989年	76校	「日本における韓国語(朝鮮語)教育」(『アジア・アフリカ言語文化研究』42号、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、1991年)
1990年	92校	「日本における韓国語教育の問題点(日本에 있어서 韓国語教育의 問題点)」(『二重言語学会誌』10号、二重言語学会、1993年、韓国)
1993年	115校	『統一日報』(1993年3月19日)
1995年	143校	『日本における韓国語教育実態の調査報告(日本에 있어서 의 韓国語教育 実態調査 報告)』(韓国教育財団、1996年、韓国)
1998年	215校	前掲『日本の大学等における韓国朝鮮語教育—2002年度調査の中間報告—』
2000年	263校	前掲『日本の大学等における韓国朝鮮語教育—2002年度調査の中間報告—』
2001年	285校	前掲『日本の大学等における韓国朝鮮語教育—2002年度調査の中間報告—』

1961年は、日韓国交正常化に漕ぎ着ける4年前のことで、日本の大学ではわずか5校だけが韓国語教育を行っていた。次いで、1977年の29校から、1984年の47校に増加したのは、1976年、「NHKに朝鮮語講座の開設を要望する会」がつくられて署名運動を開始したこと⁽⁴⁾や、また日本の大学に朝鮮語講座を設ける動き⁽⁵⁾が加わったためと思われる。

この日本の大学における韓国語教育にとってターニングポイントになったのは、1988年、ソウルオリンピックの開催である。韓国語科目の開設は68校にも達して、1984年より44.7%も伸びたのである。グローバル化時代の1990年代に入ってから、つまり1993年には、従来の二桁から三桁に跳ね上がり、115校と爆発的な上昇を見せた。さらに、2002年の日韓のワールドカップ共催を控えて、2001年には韓国語科目の増設は鰻登りとなり、285

校にも至った。さらに最近では、日本に韓国の映画が数多く紹介され、またテレビドラマが日本のお茶の間に放映されることになって、日本国内に韓国語ブームが巻き起こっている。「財団法人国際文化フォーラム」の調査によると⁽⁶⁾、2002年度は韓国語科目を採択している大学は300校に達するとの予想までしている。この傾向を図で表したのが、以下の（図1）である。



このように、日本の大学における韓国語科目の増加は甚だしく、日本国内の約500校を数える4年制大学の中で、6割が韓国語の課程を設けていることになる。この増加を加速させる主な原因は、グローバル化時代の到来による両国の経済協力の必要性、これと相まった文化交流が一層緊密になったことによるものと言えよう。

（2）大学の初級韓国語テキスト

韓国語科目の増設に伴って、多種多様の韓国語学習用テキストが出版されている。以下の（表2）では、日本の大学で採択されている初級韓国語テキストを網羅している。

（表2）における初級韓国語テキストは、主に日本の大学における「基礎〇〇語」、「初級〇〇語」、「入門〇〇語」の科目名のテキストとして初修韓国語学習者に提供されている。大学によって科目名は異なるものの、「基礎」、「初級」、「入門」と名付けている科目は、初修韓国語科目の意味である。以下では、初修韓国語科目の多様な名称を統一して「初級」と称する。ところで、ここで「〇〇語」という表現は、韓国語をめぐる多様な名称が存在するため、その多様性の全てを含む意味で便宜上用いたものである⁽⁷⁾。

(表2) 日本の大学における初級韓国語テキスト

番号	テキスト (出版社)	初出年度
1	『新しい朝鮮語』(白帝社)	1989年
2	『アルギシウン韓国語』(白帝社)	2002年
3	『いますぐ話せる韓国語入門編』(東進ブックス)	1998年
4	『うまくなる!韓国語ステップ50』(明石書店)	2001年
5	『ウリマル』(白帝社)	2001年
6	『書いて覚える初級朝鮮語』(白水社)	1993年
7	『韓国語コミュニケーションⅠ』(下田タイプ印刷)	1999年
8	『韓国語Ⅰ』(放送大学教育振興会)	2002年
9	『韓国語(初級)』(白帝社)	2000年
10	『韓国語会話入門』(東方書店)	1995年
11	『韓国語がびっくりするほど身につく本』(あさ出版)	2001年
12	『韓国語入門』(ひつじ書房)	1996年
13	『韓国語レッスン(初級Ⅰ)』(スリーエーネットワーク)	1999年
14	『韓国語レッスン(初級Ⅱ)』(スリーエーネットワーク)	2001年
15	『聴いて覚える朝鮮語』(白水社)	2002年
16	『基礎から学ぶ韓国語講座』(国書刊行会)	2002年
17	『基礎朝鮮語(会話編)』(白帝社)	1992年
18	『基礎朝鮮語(文法と作文)』(白帝社)	1992年
19	『きょうから使える生活韓国語』(評論社)	1990年
20	『グローバル朝鮮語』(くろしお出版)	1996年
21	『語学王』(三修社)	1998年
22	『言葉の掛け橋』(白帝社)	2000年
23	『コミュニケーション韓国語Ⅰ』(第三書房)	1996年
24	『コミュニケーション韓国語(会話編1)』(白帝社)	2001年
25	『コミュニケーション韓国語(文章編1)』(白帝社)	2001年
26	『これならわかる!朝鮮語』(白水社)	1998年
27	『しっかり学ぶ韓国語』(ベレ出版)	1999年
28	『実践旅行会話韓国へ行こう!』(NHK出版)	2001年
29	『CDレッスン驚くほど身につく韓国語』(高橋書店)	2001年
30	『至福の朝鮮語(改訂新版)』(朝日出版社)	2000年
31	『新韓国語入門』(高麗書林)	1997年
32	『スタンダードハングル講座①』(大修館書店)	1989年
33	『総合韓国語1』(白帝社)	2002年

34	『総合韓国語 2』(白帝社)	2002年
35	『朝鮮語を学ぶ』(白帝社)	1994年
36	『朝鮮語を学ぼう』(三修社)	1987年
37	『朝鮮語の入門』(白水社)	1981年
38	『使える朝鮮語』(白水社)	1997年
39	『NEW韓国語基礎から会話まで』(角川書店)	1992年
40	『入門者のための朝鮮語講座』(白帝社)	1998年
41	『入門ハングル文法と会話』(雲南堂)	1985年
42	『はじめての韓国語会話』(新星出版社)	2000年
43	『はじめてのハングルレッスン』(講談社)	1986年
44	『はじめて学ぶ韓国語』(語研)	1987年
45	『ハングル基礎会話』(白帝社)	1988年
46	『ハングル基本会話』(白帝社)	1994年
47	『ハングル教本』(新幹社)	1992年
48	『ハングルを学ぶ』(白帝社)	1994年
49	『ハングルを学ぼう』(白帝社)	1998年
50	『ハングル初級』(白水社)	2002年
51	『ハングル初級』(大修館書店)	1993年
52	『ハングルの基礎』(大修館書店)	1988年
53	『表現が広がるこれからの朝鮮語』(三修社)	2001年
54	『標準韓国語教本』(白帝社)	1994年
55	『Friendly Korean 1』(オフィス・ミケ発行)	2000年
56	『ポイントレッスン入門韓国語』(東方書店)	1995年
57	『やさしい韓国語講座』(語研)	1991年
58	『やさしい韓国語入門』(国際語学社)	2001年
59	『よくわかる韓国語①』(白帝社)	2002年
60	『わかりやすい朝鮮語の基礎』(東洋書店)	1995年

(50音順に基づく整理)

* 前掲「大学等の韓国語授業で使われている教材」及び「副教材」(『日本の大学等における韓国朝鮮語教育』)や拙稿「日本における「朝鮮語」の名称」(『言語と文化』8号、甲南大学国際言語文化センター、2004年)を参考にして、初級韓国語テキストのみを記す。

* 韓国で出版されているテキストは省く。

(図1)の日本の大学における韓国語科目の開設や(表2)の日本の大学における初級韓国語テキストの初出年度を比べてみると、そのテキストの数は大学における韓国語科目の開設と比例して増加している。ちなみに、(表2)の初級韓国語テキストは1980年代後半か

ら2002年に至るまで発行され、採択されているものである⁽⁸⁾。この初級韓国語テキストに加えて、一般人向けのテキストまで含めると、その数は膨大にのぼる。

第2章 初級韓国語テキストと文法用語

日本の大学が採択している、初級韓国語テキストの上位20を紹介し、どのような教育を中心とするテキストなのか、さらにはその上位5のテキストを対象に、文法用語について調べる。

(1) 大学における初級韓国語テキスト

日本の大学で採択している初級韓国語テキストの上位20位までを明記する。その中から、大学におけるテキスト選択の傾向を探る。

(表3) 日本の大学における上位20の初級韓国語テキスト

ランキング	書名 (出版社)
①	『これならわかる! 朝鮮語』(白水社)
②	『コミュニケーション韓国語 (会話編1)』(白帝社)
③	『言葉の掛け橋』(白帝社)
④	『書いて覚える初級朝鮮語 (改訂版)』(白水社)
⑤	『総合韓国語1』(白帝社)
⑥	『韓国語 (初級)』(白帝社)
⑦	『基礎から学ぶ韓国語講座』(国書刊行会)
⑧	『韓国語レッスン (初級1)』(スリーエーネットワーク)
⑨	『総合韓国語2』(白帝社)
⑩	『Friendly Korean 1』(オフィス・ミケ発行)
⑪	『至福の朝鮮語 (改訂新版)』(朝日出版社)
⑫	『ハングル教本』(新幹社)
⑬	『アルギシウン韓国語』(白帝社)
⑭	『使える朝鮮語』(白水社)
⑮	『わかりやすい朝鮮語の基礎』(東洋書店)
⑯	『ポイントレッスン入門韓国語』(東方書店)
⑰	『聴いて覚える朝鮮語』(白水社)
⑱	『NHKテレビ ハングル講座テキスト』(日本放送出版協会)
⑲	『やさしい韓国語入門』(国際語学社)
⑳	『韓国語コミュニケーションI』(下田タイプ印刷)

*前掲「大学等の韓語授業で使われている教材」(『日本の大学等における韓国朝鮮語教育』)に基づいて、上位20までのみを記す。

*韓国出版のテキストはランキングから省く。

以上の初級韓国語テキストは、大学において初修韓国語学習者に提供されているものである。日本で出版している初級韓国語テキストに韓国で出版されたテキストを加えると、多少その順位の変動が起こるが、ここでは韓国出版のテキストは入れないことにする。

テキストの採択は大学ごとに異なるが、その傾向は「会話（話す・聞く）」と「読解（読む・書く）」に分けて別々のテキストを採択するケースや、一冊のテキストを選んで「会話（話す・聞く）」と「読解（読む・書く）」を総合的に学習するケースに大別できる。

この「話す・聞く」中心のテキストは、(表3)において「○○○会話、○○○コミュニケーション、聴いて○○○、話せる○○○、○○○会話編」のように表している。一方、「読む・書く」中心のテキストは、「書いて○○○、○○○文章編、○○○文法と作文」と記している。これらと区別ができない表現のテキストは、たいてい「話す・聞く・読む・書く」の全てを網羅して学習するものと見なして差し支えない。例えば、その代表的なものが(表3)の⑤と⑨である。このテキストは1～4までのシリーズで、1～2が初級と明記している。

ところで、この(表3)から日本の各大学における初級韓国語テキストの選択が、「会話」と「読解」に分けるテキストの選択ではないことがわかる。つまり、「会話」と「読解」を網羅して学習するテキストの採択傾向にあると言えよう。例えば、(表3)における②の「会話」テキスト(表2では24)は選択の上位に入っているが、(表2)の25は、同じ著者の「読解」テキストであるにもかかわらず、上位にはつけていない。また、(表2)における17や18も「会話」や「読解」に分けているテキストであるが、上位採択につけていない。これらがその傾向を裏付けている。

(2) 文法用語

以下では、初級韓国語テキストにおける文法用語について考察する。(表3)における1位から5位までの①～⑤を対象にして、文法用語を調べていく。そこで、初級韓国語テキストの中から幾つかの文法用語を取り上げて、韓国の「学校文法」⁹⁾とも比較を行う。

a. 母音

韓国語の母音には、「ㅏ、ㅑ、ㅓ、ㅕ、ㅗ、ㅛ、ㅜ、ㅠ、ㅡ、ㅣ」と、さらにこれを組み合わせた「ㅗ、ㅛ、ㅜ、ㅠ、ㅑ、ㅓ、ㅕ、ㅗ、ㅛ、ㅜ、ㅠ、ㅡ、ㅣ」がある。韓国の「学校文法」用語では、前者は「単母音」、後者は「重母音」としている。

ところで、(表3)の①～⑤における名称を調べて整理すると、以下の通りである。

(表4) 韓国語母音の名称

韓国	単母音	重母音
①	基本的な母音字	複合母音
②	基本母音字母	派生母音字母
③	単母音	重母音
④	基本母音字	複合母音
⑤	母音字	母音字

*表における韓国は「学校文法」用語を意味する。以下では、同じ意味で用いる。

*①～⑤は(表3)における上位五つのテキストである。以下の(表)においても同じである。

(表4)における韓国語母音の名称は韓国語学習の基本とも言えるが、日本の①～⑤においてはその名称がそれぞれ異なっている。この中で、③だけは韓国の名称を踏襲している。

b. 発音現象

次に、韓国語では発音の際、バッチム(終声)とその次に続く初声とがぶつかり合って発音しやすいように音に変化する現象が起こる。いわゆる、「口蓋音化」、「濃音化」、「鼻音化」、「流音化」、「激音化」が起こるのだが、これを理解するためには「終声(末音)法則」がわからないといけない⁽¹⁰⁾。

(表3)における①～⑤の発音現象に関する用語を整理すると、次のようである。

(表5) 発音現象に関する用語

テキスト	発音現象の用語
①	激音化。鼻音化、濃音化、流音化の用語は使わず、説明あり。口蓋音化、終声規則の言及なし。
②	激音化・鼻音化・濃音化。流音化の用語は使わず、説明あり。口蓋音化、終声規則の言及なし。
③	口蓋音化・激音化・鼻音化・側音化。濃音化、終声規則の言及なし。
④	口蓋音化・鼻音化・濃音化・流音化。激音化、終声規則の用語は使わず、説明あり。
⑤	口蓋音化・激音化・鼻音化・流音化・終声規則。濃音化の言及なし。

①～⑤では、発音現象に関する説明は行われているものの、それぞれ文法用語を提示しての説明かどうか、またどこまでの発音現象を取り上げるのか定かではない。また、文法用語そのものも異なる場合があって、初修韓国語学習者に参考となる明確な文法用語の提示や説明とは言えない。つまり、①においては「激音化」に関しては文法用語を用いているが、「濃

音化・鼻音化・流音化」に対しては文法用語を用いず、説明を行っている。さらには、「口蓋音化・終声規則」については言及していない。

②は、「激音化・鼻音化・濃音化」については文法用語を用いているものの、「流音化」はその文法用語を用いずに説明を行っている。しかし、①と同様、「口蓋音化・終声規則」については触れていない。

③における「側音化」とは、「流音化」を意味する文法用語であり、一般的に初級韓国語テキストにはさほど見ることができない⁽¹¹⁾。

④と⑤は、発音現象について文法用語を用いて比較的詳しい説明を行っている。しかし、④は「濃音化・終声規則」の文法用語を使わず説明を行っており、⑤では「濃音化」についての言及がない。

このように①～⑤では、発音現象に関して文法用語を提示した上での説明か、あるいは提示なしでの説明か、そしてすべての発音現象を紹介しているかどうかの問題がある。

c. 数詞

また韓国語では、日本語と同様、数詞には二種類がある。(表6)で示したように、便宜上、数詞を(A)と(B)に分けて考える。つまり、数詞(A)は「하나 (一つ)、둘 (二つ)、셋 (三つ) …」の数え方であり、一方、数詞(B)は「일 (いち)、이 (に)、삼 (さん) …」を指す。

(表6) 数詞の用語

テキスト	数詞 (A)	数詞 (B)
①	固有語数詞	漢字語数詞
②	固有語系数詞	漢語系数詞
③	固有語系数詞	漢語系数詞
④	固有数詞	漢数詞
⑤	固有数詞	漢数詞

このように数詞に関して②と③、また④と⑤はそれぞれ同じ文法用語を使っているが、他のテキストでは異なる文法用語を使っている。但し、この数詞の名称に限っては、ばらつきがあっても、用語に類似性があるため、学習者に混乱を生じさせることではないと思われる。

d. 補助語幹

次いで、韓国語では補助語幹である尊敬の「～(으)시」、時制(時間)の「～았(었)」、「～烈」といった「先語末語尾」がある。初級韓国語テキストでは、以下のように表している。

(表7) 補助語幹の用語

テキスト	～았 (었)	～ (으) 시	～ㄹ
①	用語なし	尊敬の補助語幹 (接辞)	用語なし
②	過去の補助語幹	/	/
③	用語なし	用語なし	用語なし
④	過去の接尾辞	尊敬を表す接尾辞	接尾辞
⑤	過去時制補助語幹	尊敬補助語幹	未来時制補助語幹

このように①～⑤では、「～ (으) 시」、「～았 (었)」、「～ㄹ」の文法用語が様々で、ことに①は「～았 (었)」について文法用語なしで説明を行っている。なお、②は「～ (으) 시」、「～ㄹ」に関して、全く説明を行っていない。⑤は「～ㄹ」について説明は行っているが、シリーズの他の初級テキストで紹介されている。

e. 用言の否定

また、用言の否定において韓国語では、例えば「오다 (くる)」を否定して「こない」と表す場合、「안 否定=짧은 (短い) 否定」の「안 오다」と、「않 否定=긴 (長い) 否定」の「오지 않다」の二つのパターンの文法用語をもって説明する。①～⑤では、いかなる文法用語を用いているのか取り上げることにする。

(表8) 用言否定の用語

韓国	안 否定=짧은 (短い) 否定	않 否定=긴 (長い) 否定
①	もう一つの否定文	用言の否定文
②	副詞안による否定	補助用言않による否定
③	用言の否定形	動詞・形容詞・存在詞の否定形
④	안+語幹の形	語幹+지+않다の形
⑤	前置否定形	後置否定形

この(表8)でみるように、①～⑤では用言の否定に関して、それぞれに異なる文法用語を使っている。

f. 終結用語

次は、終結用語について考察しよう。まず、韓国における文法用語を取り上げて、日本の初級韓国語テキストにおける文法用語と比較してみる。

(表9) 韓国の終結用語

	格式体				非格式体	
	해라体	하개体	하오体	합쇼体	해体	해요体
平叙文	~다, ~라	~네	~오	~습니다	~아, ~어	~지요
感嘆文	~구나	~구먼	~구료	/	~ (는) 군	~ (는) 군요
疑問文	~느냐	~는가	~오	~습니까	~니	~ (으) ㅁ니까
命令文	~아라, ~어라	~게	~오	~십시오	~아, ~어	~지요, ~아요, ~어요
請誘文	~자	~세	~십시오	~ (으) 십시다	~지	~시지요

このように韓国の「学校文法」では、それぞれ文章別に六つの終結用語(～体)を提示している。ところで、韓国における終結用語の中で、「합쇼体」の「～ㅁ(습)니다」、「해요体」の「～아(어)요」、「해体」の「～아(어)」、「해라体」の「～ㄴ(는)다」について、①～⑤は、それぞれ以下の(表10)のように紹介している。

(表10) 日本の初級韓国語テキストにみる終結用語

テキスト	갑니다(行きます)	가요(行きます)	가(行く)	간다(行く)
①	あらたまった表現	うちとけた表現	うちとけた表現の普通形	現在形の普通形の語尾
②	かしこまった丁寧形	うちとけた丁寧形	/	/
③	합니다体	해요体	/	/
④	上称形	略待上称形	略待下称形	下称形
⑤	最敬体の平叙形	敬体の平叙形	○	○

(表10)における①～⑤は、それぞれ結語用語が異なり、②や③は「해体」の「～아(어)」、「해라体」の「～ㄴ(는)다」について説明を行っていない。ところで、⑤では紹介していないものの、シリーズの2冊目で紹介されているため○と記した。

このように多様性に富んだ文法用語は、中・上級韓国語を受講した場合、同じ系列のテキストを使わない限り、理解しづらい内容になっている。要するに、初級・中級・上級のテキストにおける文法用語に一貫性がないと、学習者に混乱を生じさせ、学習の妨げになりかねないのである。

しかし、(表3)における⑤と㉔以外のテキストは、同じ著者が中級までのテキストを出版しておらず、なお同じ著者が上級のテキストまで出しているケースは、今のところ見あたらない。

以上、日本における初級韓国語テキストの文法用語にはばらつきがあり、初級以降の中・上級韓国語学習においても、同じ著者のテキストを使わないと、学習に支障をきたす可能性がある。

第3章 初級韓国語テキストの収録内容と韓国語授業の形態及び検定試験

本章では、初級韓国語テキストの収録内容と、大学の授業形態や検定試験との関係について考察していく。

(1) 収録内容

a. 文法

まず、①～⑤の初級韓国語テキストには、いかなる内容を収録しているのかを調べて、示すことにする。

(表11) 初級韓国語テキストの収録内容

テキスト	収録内容
①	発音 (母音・子音)、数詞、否定、指定詞、尊敬語、不可能、過去形、連体形 (現在)、ㄷ・ㄹ・ㄴ・ㄷ・ㄴ・ㅎ・ㄹ・ㄹ 변則、辞書の引き方
②	発音 (母音・子音)、数詞、否定、過去形、不可能、指定詞、存在詞、不可能、希望表現、ㄷ・ㄹ・ㅎ・ㄹ 변則
③	発音 (母音・子音)、数詞、否定、尊敬語、不可能、過去形、連用形、辞書の引き方、ㄷ・ㄹ・ㄴ・ㄷ・ㄴ・ㄹ・ㄹ 변則、連体形 (未来・現在・過去・回想・大過去)
④	発音 (母音・子音)、数詞、否定、指定詞、尊敬語、不可能、過去形、辞書の引き方、ㄷ・ㄹ・ㄴ・ㄷ・ㄴ・ㄹ・ㄹ 변則、ㄷ・ㄹ・ㄴ・ㄷ・ㄴ・ㄹ 변則、連体形 (未来・現在・過去・回想・大過去)
⑤	発音 (母音・子音)、数詞、指定詞、否定、尊敬語、不可能、過去形、하 변則

(表11) の①～⑤では、その収録内容のばらつきが明確に現れている。同じ内容を収録している場合でも、④は変則に関して具体的な説明や例文を取り上げていない。一方、③は変則に関する具体的な説明を行っており、変則についての収録有無はもとより、詳細な説明が伴っているかどうかということも問題である。

ところで、①～④の収録内容は、初級学習だけのものなのか、それとも初級の半分なのか、あるいは中級までを想定しているのか、定かではない。但し、⑤はその中で1・2巻を合わせて初級と規定しており、そうすると⑤だけは初級の半分に当たると考えられる。したがって、⑤は(表11)における収録内容は①～④より少ないのである。

すでに、菅野裕臣氏は初級韓国語で扱うべき内容について呼びかけていたが⁽¹²⁾、韓国語教育が活性化している今なお、収録内容のばらつきに関する是正や努力は行われていないのが現状である。

b. 語彙

初級韓国語テキストの水準を決めるのは、上記で示した収録内容はもとより、語彙数やその水準も重要であり、その分析は欠かせない。ここでは、語彙数のみを対象にして言及する。

①～⑤のテキストで引用している語彙は、①を除く②～⑤はテキストの最後で整理している。その数を取り上げると、以下のようである。

①は整理しておらず、②は約930語、③は約1100語、④は約870語、⑤は980語である。①～⑤における収録内容の差もさることながら、引用語彙の数もまちまちである。最近、黄晷媛氏は、幾つかの韓国語学習用テキストから体言語尾や用言語尾、副詞といった機能語を除く、使用頻度の高い730語彙を選別して整理する研究を行っている⁽¹³⁾。氏の試みは、高く評価できるものの、初級韓国語テキストや日本で実施される検定試験を視野に入れた語彙の整理ではない点が、不十分と言えよう。この語彙数は「ハングル能力検定試験」や「韓国語能力検定試験」とも関わる重要な問題であり、後ほど触れることにする。

以上、①～⑤における収録内容にはばらつきがあり、なお語彙数においても同じ傾向が見られた。これらの問題は、初級のみならず、中・上級の授業にも深く関連してくる問題であるため、このばらつきに対する是正・統一はより一層強く求められる。

(2) 韓国語授業の形態

初級韓国語テキストの収録内容とコマ数、そして中・上級韓国語へ継続して学習する際における一貫性の観点から考察する。

初級韓国語科目は、一般的に通年でもセメスタ（前期・後期）でも2コマで、1コマ当たりの授業回数は定期テストを除いて、通年の場合は28回、セメスタの場合は前期14回と後期14回を実施している。これを年間に換算すると、2コマで合計の授業回数は56回になる。

さらに、詳細なコマ数については、通年（2コマ）・セメスタ（前期2コマ＋後期2コマ）・セメスタ（後期4コマ）の形態で整理することができる。一般的に「話す・聞く」、そして「読む・書く」の技能に分けて授業を行っているが、この「話す・聞く」技能中心の授業を「会話」、そして「読む・書く」技能中心の授業を「読解」とする傾向が強い。

通年の場合、2コマ／週の授業で4単位に換算する。この授業の2単位（1コマ）は「話す・聞く」＝「会話」、そして残りの2単位（1コマ）が「読む・書く」＝「読解」中心の授業である。この「会話」と「読解」の授業は、それぞれ1コマ（90分）ずつの授業を行う。

一方、セメスタの場合、前期と後期に分けて成績を出しているが、コマ数と単位は通年と同じである。大学によっては、前期の授業は実施せず、後期には倍のコマ数でもって対処して、半期だけで4単位を取得させることもある。以上をまとめて示すと、以下の（表12）になる。

(表12) 日本の大学における初級韓国語の授業形態

形態	コマ及び単位数		授業内容／単位／授業時間
通年	コマ	2	1コマ：話す・聞く、1コマ：読む・書く
	単位	4	4単位は通年で2コマ：1コマは90分授業
セメスタ	コマ	(前期) 2	1コマ：話す・聞く、1コマ：読む・書く
		(後期) 2	1コマ：話す・聞く、1コマ：読む・書く
	単位	(前期) 2	2単位は2コマ：1コマは90分授業
		(後期) 2	2単位は2コマ：1コマは90分授業
	コマ	(前期) 0	2コマ：話す・聞く、2コマ：読む・書く
		(後期) 4	
	単位	(前期) 0	4単位は4コマ：1コマは90分授業
		(後期) 4	

以上、(表12)における初級韓国語のコマ数、単位、授業時間は、日本の大学における最も一般的な形態である。その実際の中身をみると、授業時間の配置が若干異なるだけで、年間の単位、コマ数、授業時間は同じである。

ところで、日本の大学においては他の授業形態も存在している。例えば、大学によっては通年で1コマ、あるいは通年で4コマの授業を実施しているところもある。

次に初級韓国語テキストにおける収録内容(表11)と、一般的な初級韓国語の授業形態(表12)との相関性であるが、結論的に言うと、(表11)における①～⑤の収録内容はばらばらで大学の授業を考慮した収録内容とは言えない⁽¹⁴⁾。収録内容がまちまちであるため、(表12)の授業形態に当てはめると、初級韓国語テキストの選択によって学習のばらつきが生じてくると思われる。テキストに書いていない内容を教師が補うこともあり得るが、基本的にはテキストの内容をベースに学習すると見なすのが妥当であろう。

なお、日本の大学の多くは初級韓国語を学習した学習者が中・上級韓国語へ進んで学習できるように、一貫性のあるカリキュラムを整えている。その一方で、初級科目しか開設しない学校もあれば、中級までしか設けていない学校もある。

以上のことから、初級韓国語のテキストを出版する際には、大学における韓国語の授業形態を考慮すべきであり、さらには中・上級テキストにまでその統一性をはかる必要があると思われる⁽¹⁵⁾。

(3)「韓国語・朝鮮語」の検定試験

現在、日本における韓国語に関する検定試験は二つある⁽¹⁶⁾。一つは「韓国語能力検定試験」、もう一つは「ハングル能力検定試験」である。前者は韓国の「財団法人韓国教育財団」、後者は日本の「ハングル能力試験検定協会」が実施している試験である。

しかし、二つの検定試験の実施団体はともかく、両検定試験ではレベル分けや語彙数が甚だ異なっているのである。次の(表13)は、両者のレベル分けや水準を対比している。

(表13) 日本における「韓国語能力検定試験」と「ハングル能力検定試験」

「韓国語能力検定試験」		「ハングル能力検定試験」	
分類	水準	分類	水準
6級	高度な言葉、文章(新聞・雑誌・教養書・文芸作品など)やテレビ・ラジオ、講演などの内容を十分理解し、文章または言葉で正確に伝達でき、討議・討論で自分の意見を正確に述べられる程度。	1級	高度な内容の韓国・朝鮮語を聞き、話し、読み、書くことができる。様々な情報を摂取し、比較相対化しつつ、自らの知に統合し、それらの情報を利用しながら、独自の主張を韓国・朝鮮語で展開できる。本国で授業が聞けて、韓国・朝鮮語で討論ができる程度。
5級	日常言語活動において不便がなく、文章(新聞記事、説明文、書簡等)やテレビ・ラジオのニュースや平易な解説などを理解し、自分の意見を述べられる程度。	準1級	高度な内容の韓国・朝鮮語を聞き、話し、読み、書くことができる。映画やテレビ、ラジオ放送が十分理解でき、スピーチ、通訳もできる。ほとんど辞書を引かずに、新聞、文芸作品などを読みこなし、自分の考えを適切な文体で不自由なく書き表すことができる程度。
4級	日常言語の使用は十分可能、電話での問題処理も可能で一般文書の構造はほとんど理解できる程度。	2級	日常生活や職業上の用務を果たす上で必要な韓国・朝鮮語を聞き、話し、読み、書くことができる。電話で会話ができ、新聞、雑誌などを読んでほとんど理解できる。なお、手紙を読んだり書いたりができる程度。
3級	日常言語生活において語彙に不便がなく、よく使われる言葉、文章をゆっくり聞けば十分理解でき、短い文で意思伝達が可能な程度。	準2級	日常生活に必要な一般的な韓国・朝鮮語を聞き、話し、読み、書くことができる。電話で簡単な会話ができ、辞書を引いて新聞、雑誌などを読んである程度理解でき、また簡単な手紙を読んだり書いたりができる程度。
2級	基本的な韓国語を話し、読み、書くことができ、基本語彙1500～3000程度を用いた文章を理解し、簡単な対話が可能な程度。	3級	平易な韓国・朝鮮語を聞き、話し、読み、書くことやホテルで、予約ができる。郵便局で手紙が出せて、駅などの窓口で用を促す程度の簡単な会話がわかる。基礎的な説明文、広告文が理解でき、簡単な文章を正しく書くことができる程度。
1級	基本文型と基本語彙1000語程度を用いた短い文を読み、理解し、簡単な挨拶言葉、慣用句表現が可能な程度。	4級	基礎的な韓国・朝鮮語を読み、書き、聞き取ることや初歩的な語句で簡単な挨拶と紹介ができる。ある程度辞書を使う事や基礎的な単語で短い文章を書くことができる。基本語彙は615語。
	／	5級	ハングルのごく短い文章を読み、書き、聞き取ることができる。1から10まで数えることができ、決まり文句としての簡単な挨拶ができる。基本語彙は304語。

* 「韓国語能力検定試験」に関しては、既出問題集の『第7回韓国語能力試験』(財団法人韓国教育財団編集、三修社、2004年)、また「ハングル能力検定試験」は、既出問題集の『第23回ハングル能力検定試験』(ハングル能力検定協会、2004年)による。

この「韓国語能力検定試験」と「ハングル能力検定試験」は各級の分類が正反対であり、その語彙数も異なる。語彙の水準はともかく、例えば「ハングル能力検定試験」の既出問題集における「4・5級単語リスト」には⁽¹⁷⁾、「ハングル検定試験協会」が独自に、最低レベルの5級は304語、4級は615語の語彙数を選定して掲載している。

しかし、「韓国語能力検定試験」における語彙数は最低レベルの1級が1000語、そして2級が1500語のレベルである。「韓国語能力検定試験」における最低レベルの語彙数と、「ハングル能力検定試験」の4級と比べても、語彙数は前者が2倍以上になる。(表13)において両検定試験を対比しているが、表面的にはそれぞれ対応する同じ級であっても、「韓国語能力検定試験」の水準が「ハングル能力検定試験」より高いのである。

①～⑤のテキストにおける語彙は、「ハングル能力検定試験」4・5級に①～⑤のすべてが対応できるが、「韓国語能力検定試験」は最低レベルの1級に③しか対応できない。つまり、①～⑤は収録内容と語彙から、検定試験の「韓国語能力試験」とは関連性が薄いと言えよう。

ところで、ヨーロッパにおける複数外国語の学習を促進するために、「ヨーロッパ協議会 (Council of Europe)」が行った、あるいは行っているプロジェクトに、「言語教育に関する共通フレームワーク (Common European Framework of Reference for Languages)」の作成及び個人の言語学習を生涯にわたって記録する「ヨーロッパ言語ポートフォリオ (The European Language Portfolio)」の開発がある。この「ヨーロッパ協議会」は、加盟国における「共通フレームワーク」や「ヨーロッパ言語ポートフォリオ」の積極的導入を目指しており、すでにドイツでは学校教育などで取り入れられている⁽¹⁸⁾。日本における韓国語教育も、「ヨーロッパ協議会」と同様、各級やその水準などの共通の基準作りが求められる。

結びにかえて

以上、日本における韓国語教育をめぐる初級韓国語テキストの文法用語・収録内容・語彙数、そして大学授業・検定試験との関係について考察を行ってきた。

日本の大学においては韓国語科目の開設が増加の傾向にあり、それとともに韓国語学習用テキスト、とりわけ初級韓国語テキストも数多く出版されている。その中で、大学の採択している初級韓国語テキストの上位5位までを分析すると、文法用語がテキストごとに異なっており、収録内容や語彙数もまちまちであることが明らかとなった。

さらに、初級韓国語テキストの収録内容は大学の授業形態と関連性が薄く、また「韓国語能力検定試験」や「ハングル能力検定試験」ともかみ合っていない。このような状況であれば、初級韓国語受講の後、同じ著者のテキストではない場合、韓国語学習に混乱や支障をもたらす可能性が高く、同じく初級韓国語を学習しても実力のばらつきが生じることも予想されるのである。

この状況の解消をめぐる議論や意見を述べ合う場として、日本では戦後から今に至るまで『朝鮮学報』がその役割を果たしている。ところで、この『朝鮮学報』は韓国・朝鮮に対する歴史から言語までの様々な研究領域を網羅する「韓国・朝鮮学」雑誌であって、韓国語に限る専門雑誌ではない。

しかし最近、日本における韓国に対する関心の高まりとともに、各大学における韓国語科目開設が増える影響をうけて、2002年には韓国語に関する専門雑誌の『朝鮮語研究』が発行されるに至った⁽¹⁹⁾。この『朝鮮語研究』の発行は、日本における韓国語に関する様々な議論や呼びかけのできる専門の場が誕生したということで、その意味は大きい。なお、「朝鮮語教育研究会」⁽²⁰⁾という集まりも活発な研究会の活動をしているが、学術雑誌を発行するまでは至っていない⁽²¹⁾。さらには、各大学では韓国語専任教員数が増えており⁽²²⁾、その大学の紀要も問題提起の場を提供している。

このような様々な場を通して、初級韓国語テキストにおける諸問題は、中・上級テキストとの関連や大学の授業形態、検定試験との関わりも考慮して統一をはかる必要であろう⁽²³⁾。その際、いかなる学習に重点をおいたテキストの出版を目指すのかも欠かせない議論のテーマである。

本稿で指摘してきた問題点の改善は、日本の韓国語教育の発展に役立つだけでなく、韓国語学習をめぐる大学教育の学習目標や水準を定めることにも貢献できると思う。

注

- (1) この韓国語学習用テキストに関しては、拙稿「日本における「朝鮮語」の名称」『言語と文化』8号、甲南大学国際言語文化センター、2004年）193～194頁を参考されたい。
- (2) 菅野裕臣「朝鮮語教授の若干の問題点」(『朝鮮研究月報』15号、日本朝鮮研究所、1963年)。本稿では、氏の提案を踏襲するのではなく、初級韓国語テキストに盛り込む収録内容を同じくすることで考えていきたい。参考のため、その提案を紹介すると、以下の通りである。

体言、格一ほとんどすべて

用言、語幹、語基について明確な理解を与える

変格活用一全部

現在語幹のみ(～ㄷㄹ, ~ㄹ 語幹のものは省く)

時称のカテゴリー全部

終止形一陳述形・疑問形・命令形・勧誘形

敬称のカテゴリ

書き言葉の代表として一下称形

話し言葉の代表として一上称形

連体形、両者を並行させて教える

連体形一全部

接続形(～게, ~고, ~나, ~니, ~다가, ~래, ~려, ~며, ~면, ~면서, ~자のみ)

名詞形一全部

- (3) 最近、韓国語学習用テキストに関する研究が散見されるようになった。例えば、発音表記に関しては、拙稿「日本における韓国語学習用テキストの発音表記と学習者」(『東アジア研究』28号、大阪経済法科大学アジア研究所、2000年)、そして語彙は黄晷媛「入門期の韓国語教材における語彙調査(上・中・下)」(『韓国言語文化研究』第4・5・6巻、九州大学韓国言語文化研究会、2003・2004年)や黄晷媛「韓国語教育における教育語彙の選定に関する一考察」(『ポリグロシア (Polyglossia)』第9巻、立命館アジア太平洋大学言語教育センター、2004年)が取り上げられる。
- (4) 矢作勝美「NHKに朝鮮語講座を」(『季刊三千里』38号、三千里社、1984年)
- (5) 大村益夫「大学の朝鮮語講座」(『季刊三千里』6号、三千里社、1976年)や、玉城繁徳「大学に朝鮮語講座を」(『季刊三千里』28号、三千里社、1981年)
- (6) 『日本の大学等における韓国朝鮮語教育 — 2002年度調査の中間報告 —』(財団法人国際文化フォーラム、2003年)
- (7) 言語の名称に関しては、前掲拙稿「日本における「朝鮮語」の名称」(『言語と文化』)を参照されたい。
- (8) 2002年以降、出版している初級韓国語テキストも多い。例えば、『はじめての韓国語』(白水社、2003年)、『ゼロから話せる韓国語』(三修社、2003年)、『今日から話そう韓国語』(三修社、2004年)、『チャレンジ!韓国語』(白水社、2004年)、『フレンドリーコリアン』(明石書店、2004年)などを取り上げられる。
- (9) 学校文法とは、学校で教授・学習される文法で、統一性や実用性を持っており、正しい言語生活のため一定の基準に基づいて言語を規定したものである。詳しくは、イグァンギョ (이관규)『学校文法論』(図書出版月印、1999年、韓国)に参照されたい。
- (10) 「濃音化」や「終声(末音)法則」に関して、さらに詳しくは拙稿「韓国語学習における「濃音化」現象」(『ポリグロシア (Polyglossia)』第9巻、立命館アジア太平洋大学言語教育センター、2004年)を参照されたい。
- (11) 『ハングル初級』(大修館書店)では、「流音化」を「舌側音化」ともする。
- (12) 前掲菅野「朝鮮語教授の若干の問題点」(『朝鮮研究月報』)
- (13) 前掲黄「韓国語教育における教育語彙の選定に関する一考察」(『ポリグロシア (Polyglossia)』)を参照されたい。
- (14) (表2)の7はⅡまで出版しているが、市販しておらず、拓殖大学における韓国語教育に合わせたテキストとして発行している。
- (15) 大江孝男「日本における韓国語(朝鮮語)教育」(『アジア・アフリカ言語文化研究』42号、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、1991年)140頁で、氏は中・上級韓国語テキストにおいても同じ内容の収録を提案している。
- (16) 「韓国語能力検定試験」は1997年、「ハングル能力検定試験」は1993年から実施されている。前者は年1回(秋期)、後者は年2回(春期・秋期)の実施である。
- (17) 『第19回ハングル能力検定試験』(ハングル能力試験検定協会、2002年)
- (18) 「共通フレームワーク」の核心部分は6段階の言語レベルを紹介している第3章で、言語能力を、基礎的な言語使用段階を表すA段階、自立した言語使用段階を表すB段階、能力のある言語使用段階を表すC段階の3つに分け、これをさらに2段階に分けて合計6レベルを設定している。「ヨーロッパ言語ポートフォリオ」は、(一)主に4技能の熟達度を「共通フレームワーク」の6レベルにしたがって自己判断するだけではなく、担当先生に証明してもらう「言語パスポート」、(二)家庭や学校、学校以外の施設で学習した状況について詳しく自分で記入する「言語学習の経歴」、(三)外国語を使って作り上げた作品(詩、手紙、物語、コラージュ、CDなど)や検定合格証明書、言語能力証明書、他の重要な書類を納める「ファイル」の3つの部分から構成されている。「共通フレームワーク」の日本語訳は、

以下のサイトで公開されている。http://www.soc.nii.ac.jp/jggl/library/cef_verzeichnis.html なお、ヨーロッパ協議会は、1945年5月、ベルギーやオランダ、フランスなどの10ヶ国によって設立された国際機関で、2004年11月現在、加盟国は46ヶ国である。加盟国が掲げている様々な目標を達成するために、国境を越えたヨーロッパレベルでの外国語教育に取り組んでいる団体である。このヨーロッパ協議会に関しては、甲南大学国際言語文化センター助教授藤原三枝子氏からご教示をいただいた。

- (19) 『朝鮮語研究』は、東京外国語大学を中心にして韓国語に関する努力が実ったことと言える。http://www.tufs.ac.jp/ts/society/tyosengo/record_j.htmlによれば、1983年の第1回から数多くの研究会を積み重ねてきている。
- (20) 同志社大学の油谷幸利氏を中心の研究会である。<http://www1.doshisha.ac.jp/~yyutani/>
- (21) 大学の韓国語教育とは直接関係がないが、「高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク」のような団体も結成されている。
- (22) 「表9 専任教員」(『日本の大学等における韓国朝鮮語教育』財団法人国際文化フォーラム、2003年)、または『日本における韓国・朝鮮研究研究者ディレクトリ (2001年調査)』(財団法人日韓文化基金、2002年)
- (23) 文法用語の統一を図る際、イムホビン・ホンギョンピョ・ジャンクウクイン (임호빈・홍경표・장국인) 編『新改訂外国人のための韓国語文法 (新改訂 外国人을 위한 韓国語文法)』(延世大学校出版部、2004年、韓国)、ベクボンジャ (백봉자) 『外国語としての韓国語文法辞典 (外国語로서의 韓国語 文法辞典)』(延世大学校出版部、2004年、韓国) が参考になると思う。